

自分でつかめ、限らない夢を！ 第1話：厳しい授業と楽しい修行

世界で最も過酷な単独世界一周ヨットレースでクラス4位に入った海洋冒険家、白石康次郎さん



白石康次郎：1967年、東京都生まれ。神奈川県三崎水産高校専攻科卒。アラウンドアローン終了後は、講演や執筆活動に追われるなか、次の同レース参加に向け、新たな意欲を燃やしている

白石康次郎さんは、日本では数少ない海洋冒険家。水産高校専攻科時代に、単独世界一周ヨットレースで活躍していた、今は亡き多田雄幸さんに弟子入りしてヨットの腕を磨き、1994年、26歳のときにヨットの単独無寄港世界一周の最年少記録を樹立。以来、カヌーやロッククライミングなどの複合種目をこなす「レイド・ゴロワーズ」など、ヨット以外のアドベンチャーレースにも積極的に参加し、ヨットにおいては2002年から2003年にかけて開催された、世界で最も過酷だと言われる「アラウンドアローン」単独世界一周ヨットレースでクラス4位の成績を収めた。

このヨットレースは、多田さんに弟子入りしたときから温めていた最大の夢だったと語る白石さん。実現するまでの17年間の足跡を、今年1月29日に当財団で行われた指導員研修会で講演されたので、その内容を連載で紹介します。

「アラウンドアローン」単独世界一周レース

1人で外洋ヨットを操り、定められた4つの港に立ち寄りながら、大西洋、インド洋、南氷洋、太平洋を走り抜け、スタート地点（前大会はニューヨーク）に戻ってくるレース。走行距離は、全レグ（区間）合わせて5万3000キロに及び、寄港地ごとに設けられる食糧補給やヨット整備のための休憩を含め、約8カ月もの長い期間、レースが続く。1982～83年の第1回大会には、多田雄幸氏が小型艇部門のクラス優勝を達成し話題になった。以後、このレースは4年に一度開催されるようになり、たった1人で世界の海を走る過酷さゆえに、世界中のヨットマンや冒険家から熱い視線が注がれている。



アラウンドアローンのスタート風景。いくつもの大きなヨットが快走しているが、どれも操船しているのは、たった1人のセーラーだ

日本から出たい！

ボクが出場した、2002—03年の第6回「アラウンドアローン」単独世界一周ヨットレースには、13カ国から13人のセーラーが参加しました。顔ぶれは実にバラエティに富んでいて、ボクと同じぐらい腕が太い女性もいれば、元バイクのレーサーや元ホテルのオーナー、そして、製薬会社をスポンサーにつけて出場を果たした糖尿病の人もいました。それぞれに事情は異なりますが、みんな何年も夢を温めて参加にこぎつけたセーラーたちです。ボクの場合も、夢を追って実に17年もの歳月が流れていました。

ただ、意外に思われるかもしれませんが、ボクの夢というのは、このレースに出るということではなかったのです。とにかく、自分の力で世界一周をしたい、そんな単純なところにあったのです。みなさんも、島や半島に旅行したとき、クルマか何かで、そこを一周してみたいと思うでしょう。ボクも、子どもの頃に水平線を眺めて、この海を渡って世界を回ってみたら、きっと面白いだろうなって思ったわけです。本当に、ただそんなところから夢が始まったのです。

家庭の事情といえば、小学校に入って間もなく母を亡くしたため、ほとんど母の温もりを覚えておりません。ボクを育ててくれたのは、昭和ひと桁生まれの厳しい父と、明治生まれの気丈な祖母でした。食事は、すき焼きならば父と祖母は牛肉で、子どもは豚肉といった具合に、ナベは1つでも取ってよい中身は分けられており、子どもの部屋にはストーブはありませんでした。冬場、父に「寒い」と言ったら、「それなら廊下を磨け」と言われたものです。

こうして実に厳しい家庭ではありましたが、親子喧嘩だけはありませんでした。なぜなら、三兄弟だったのですが子どもたちには何をしても構わない自由だけはあり、どんなことにも父は反対しなかったからです。ただし、やったことについての責任だけは持たされました。つまり、成績が悪くても、叱られない代わりに「これは、お前の責任だ」といわれるのです。洗濯も、自分たちの物は自分たちで洗っていました。洗濯物など、サボると、すぐにたまってしまいます。これも自分たちの責任だということでした。

また、私は次男だったので、いつも兄のお下がりでご飯を強いられていました。つまり、家のなかでは常にナンバー2の子だったのです。母もおらず、家の中では次男ということで辛抱させられていたので、外に愛情を求め、広い世界に飛び出したいと思うようになっていったのかもしれません。その頃に放映されていた、「兼高 薫・世界の旅」というテレビ番組を見ては、日本を飛び出す夢を膨らませていたものです。

そんな願いが少し見えてきたのが、高校進学するときでした。どの高校にしようか選んでいるとき、水産高校が目に入ったのです。調べてみると、3年生になったら研修航海でハワイに行けるじゃないですか。「これだ！日本脱出だ！」って思いました。

指をなくすよりは殴られたほうがいい！

水産高校では、エンジニアの道を選びました。プラモデルを作るのが好きで、メカに関心があったからです。また、小・中学校の時代、ボクは野球ばかりして勉強はほとんどしていませんでした。よくいるでしょう、得意科目は体育と図工、そして給食だって子が。ボクは、まさにその典型だったのです。

でも、好きなことに打ち込めるとあって、水産高校時代は猛烈に勉強しました。夏休みもほとんど休まずに、ボイラーや油圧、クレーン、冷凍設備と、片っ端から勉強したものです。冷凍設備って、どんな仕組みになっているのだろうかといった具合に、興味が沸いたことを次々に学ぶのは、実に楽しいものでした。だから、こうした資格の試験は、みんな一発で合格していました。

中学生のとき、勉強ができる友だちに、どうやって勉強したらいいのか聞いてみたことがありました。すると彼は、「白石、お前は教科書を一回読んだだけじゃ、覚えられないのか」って返されてしまい、すごくショックを受けました。「ああ、オレってバカなんだ！」ってね。

そこで、高校生になったとき考えたんです。「勉強した後に寝るから忘れてしまうんだ。それなら、勉強したまま寝ないで試験に臨めばいいんだ」と。学校から帰ったら、すぐに寝てしまい、夜の11時頃から朝まで勉強し、そのまま学校に行って試験を受けるようにしたところ、けっこうスラスラと解答できるようになりました。「バカはバカなりにできる」ということを知りましたね（笑）。

もともと、水産高校の授業は厳しいの一言でした。先生は、素晴らしい元船乗りばかりなんですけど、殴る、蹴るは当たり前。それはもう、厳しい訓練を強いられました。

エンジニアって、船が沈むと、まっ先に死ぬんです。エンジンのある船底から沈みますからね。だから、エンジニアの先生たちは筋金入りなんです。殴る、蹴るといったことにも理由があって、そこまでして徹底的に仕事を教える必要があるからなんです。たとえば、船のドアは重い鉄板でできていますから、うっかりするとドアを閉めたときに指を挟んで落としてしまいます。また、マグロを釣るロープに絡めても、指などは簡単に飛んでしまいます。飛んだ指が床に落ちてくれれば手術でつなぐこともできますが、海に落としたら拾えません。航海訓練に出て、「ただいま」と言って帰ってきたら、指が1本欠けていたなんていう学生も少なくないのです。いま、ボクがこうして五体満足でいられるのも、水産高校の先生方のおかげだと思いますし、こうした厳しい授業を受けてきたことを誇りにも思います。ただの暴力ではありません。殴られたときは、必ず、その理由を先生方が説明してくれました。それが船乗りの教育だったのです。

師匠との出会い

水産高校の生活にも慣れた頃、第1回アラウンドアローン（当時はスポンサーの名にちなんでBOCチャレンジと呼ばれていた）単独世界一周ヨットレースで、多田雄幸というセーラーがクラス優勝を遂げたというニュースが飛び込んできました。「すごいなあ、日本人が優勝したんだ」と驚きましたが、「どうせ金持ちの冒険なんだろう」なんてことを思ったりもしました。

でも、多田さんは金持ちでも何でもありませんでした。彼はボクの父と同じ年（当時52歳）で、職業は個人タクシーの運転手。38歳のある日、屋台でお酒を飲んでいたら、トレーラーに積まれたヨットが通り過ぎたので、後を追いかけていったら、それが手作りで建造されたものだったので感動したというのが、ヨットを始めるきっかけだったと言います。多田さんも、コツコツとお金を貯めては自分でヨットを建造し始め、とうとう借金を抱えながらもアラウンドアローンへの出場を果たしてしまいました。

ボクとしては、「すごい人もいるもんだ」と感心し、また、1人でヨットを操って世界を一周するレースがあるということにも衝撃を受けました。「どうせ世界一周をするのなら、ヨットがいい！」そして、「だったら、このレースに出てやろうじゃないか！」。夢が広がり、希望がメラメラと沸きました。

さっそく多田さんに電話をしたところ、「一度、来なせいや！」との返事。酒好きだと聞いていたので、一升瓶をぶら下げて東京都内の汚いアパートを訪ねました。そして、ヨットに乗せて欲しいと頼むと、「いいよ、

来なせいや！」とのこと。話をする多田さんの視線はボクが持参した一升瓶に向いていたので、きっとこのときは、お酒が飲みたかったのだと思います（笑）。

多田さんのヨット「オケラ5世」号は静岡県の清水港にあり、学校のない日曜日になると、ボクは実家の鎌倉から鈍行に揺られて清水に向かうようになりました。最初は、水産高校のように厳しい訓練を覚悟した



白石さんは1994年には、亡き多田雄幸氏が建造したヨットに乗って、単独無寄港世界一周の最年少記録を樹立した

のですが、行ってみれば「おおっ、コーチャンよく来た。おはようビールだ」と言いながら、朝からヨットのキャビンでビールを飲み出すじゃないですか。ボクはといえば、黙々とギャレー（ヨットのキャビンにある台所）で、おつまみを作るしかありませんでした。

こうして、しばらくの間「オケラ5世」号は出航せず。清水ではなく、新宿のゴールデン街（飲み屋街）に呼び出されることも少なくありませんでした。ヨットを教えてもらいたいボクとしては、イライラが募ってしまうところでしたが、ゴールデン街に行くと、多田さんの仲間も集まっていて、いろいろな話を聞くことができました。多田さんは、冒険

家の植村直己さんと大の仲良しで、植村さんが北極のオーロラーレースに出場したときには、多田さんもサポートチームの一員でした。そんなわけで、ゴールデン街には冒険家の仲間がいろいろやってくるのです。それはもう実に楽しい冒険談義が続き、ボクとしては大いに勉強になりました。

そうこうしていると、「オケラ5世」号も出航するようになりました。ただし、師匠の多田さんは「オレは酒がいい。コーチャンが好きにやれ！」と言って、ヨットを教えるどころかボクに操船を任せて自分は隣でお酒を飲むばかりなんです。ボクとしては、覚えかけの知識を駆使して必死に操船するのですが、風が強くなると、どうしても危ない場面が出てきます。

あるとき、突風を受けて「オケラ5世」号がググッと横倒しになりかけたことがありました。「ヤバイ」と思ったその瞬間。それまでボクの横でグラスを手にしていた多田さんが、お酒を一気に飲み干したと思うと、パッと立ち上がって船首へ向かい、サッとセールを調整し、すかさずコクピットに戻ってボクから舵を奪い、グッと引き寄せてアッという間にヨットの姿勢を立て直してしまいました。

「ウワーッ、すごい。多田さんって、カッコイイんだ」。やっと師匠の実力を垣間見て喜んだ、その脇で、再び多田さんは腰をおろしてお酒を飲むばかりでした。不思議なことに、揺れるヨットの上でも、お酒をこぼさないんですね。そのときは、なんてお酒に執着する人なんだろうって思いましたが、こぼれる前に飲んでしまうだけだったんですね。

あるときは、真冬の時化のなかを1人で舵を持たされ、多田さんはキャビンにこもってしまいました。しばらく走り続けましたが、手が凍えて仕方ありません。「そろそろ舵を代わってください」と言ってキャビンを覗くと、なんと多田さんは、時化で揺れるヨットの小さなキャビンのなかで、棒を握って餃子の皮を伸ばしているじゃないですか。時化の中を帆走するのは実に辛いものなのですが、そんな状況をも多田さんは楽しんでしまうのです。

思えば、水産高校では殴られ蹴られという厳しい授業。そして清水に行けば、実に自由奔放な修行が待っていたわけです。海の厳しさ、そして海の楽しさや生きることの楽しさ、この両面を同時に学ぶことができたのは、ボクにとってはすごく幸せなことでした。

水産高校は専攻科を含め5年で卒業です。船乗りに必要ないろいろな資格も取り、就職先もたくさんありましたので、卒業が決まると、さすがにボクも迷ってしまいました。そこで多田さんに電話すると、「世界一周する気があるのなら、オレについて来い！ 就職なんて必要ない！」と、勇ましい檣が飛んできました。

「その言葉について行くしかない」。そう思い直して、「ボクはヨットで世界一周に出たいので、就職はしません」と学校に申し出ましたが、「お前、5年間も水産高校で何をしていたんだ」と、先生方は絶句。父は、何も言いませんでした。

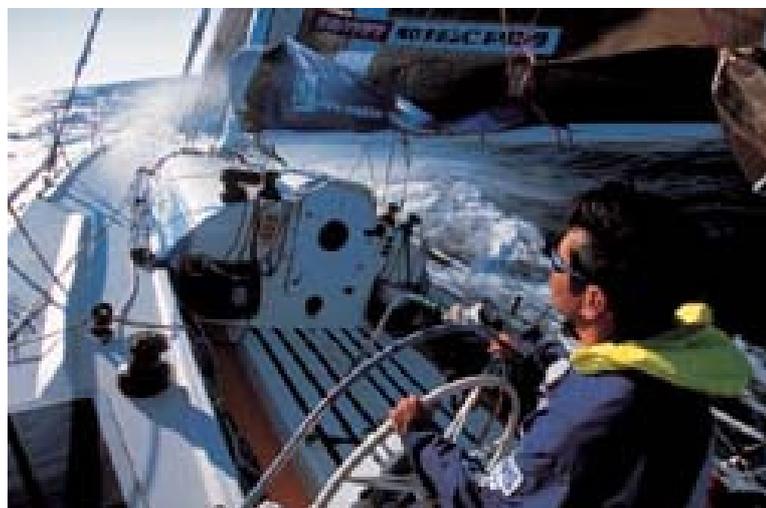
とにかく、ここまで腹を据えたのだから、この先は歯を食いしばってヨットの勉強をするしかありません。カバン1つを持って鎌倉の実家を出て、東京にある多田さんのアパー

トへ向かいました。

すると、どうでしょう。多田さんは布団にくるんだままで動こうとはしません。どうか話をしてみると、失恋したとのこと。「オレはもうダメだ！ コーチャンよ、就職してくれ」。

多田さんは躁うつ病を患っていて、進路のことで電話をしたときは躁状態のときだったのです。それが失恋したとかで、ボクが意を決して訪れたときは、うつ状態になっていたのです。何とかしなければと思い、延々と2人で話をしましたが、どうにもラチが明きません。「これから、どうしたらいいんだろう！」。ただ、ただ、呆然とするばかりでした。

(つづく)



愛艇「スピリット・オブ・ユーコー」を操って快走する
白石康次郎さん

2004年1月29日、B&G財団 指導員研修会の講演より

写真提供：舵社 / 矢部洋一